

[書評]

飯島周、小野裕康、ブルナ・ルカーシュ 編
『チャペック兄弟とその時代——*Bratři Čapkové a jejich doba*』
(日本チェコ協会、2017年、178頁)

半田 幸子

チャペック兄弟といえば、チェコのメディア史上もっとも有名な兄弟といえるであろう。兄ヨゼフ（1887–1945）は作家、劇作家、画家、挿絵画家、詩人として活躍し、弟カレル（1890–1938）は、戯曲『ロボット R.U.R.』やSF小説『山椒魚戦争』などで知られる劇作家、作家であり、また童話やエッセイも数多く執筆した。2人はともにジャーナリストとしても活躍した。なお、主に初期の頃だが、「チャペック兄弟」という共同名義でも小説や戯曲を発表している。

2015年10月11日に東京外国語大学で、兄弟を取り上げたシンポジウム「チャペック兄弟とその時代——変わったもの、変わらぬもの（カレル・チャペック生誕125周年、ヨゼフ・チャペック没後70周年記念シンポジウム）」が開催された。本書は、その時の記録を残した、濃密なチャペック論集である。構成は全3部、9名の執筆者による論文に加え討論会の記録から成る。シンポジウムで発表した8名の論考に、特別寄稿論文1本が加えられた。

本書は、筆者のようにシンポジウムを聞き逃した読者でも、シンポジウムを振り返り、チャペックを多面的に捉え直すことができる貴重な一冊である。

本論集は、執筆陣から内容面含め、実に幅広く網羅している。執筆陣には、日本のチェコ研究を牽引する面々が揃う。分野は、政治学、政治史、文化、文学、比較研究など多彩で、重鎮、中堅、若手が揃い、かつ、日本文学・文化研究者も名を連ねる。本書を読めば、日本でのチャペック研究の現況を把握できる内容だともいえよう。本稿では、以下、本書の主な内容紹介に注力したい。

第1部では、「K・チャペックとその時代」と題し、チャペック兄弟両者に光を当て、彼らの時代背景にある「第一次世界大戦」「建国」「政治」「選挙」「芸術」「多文化社会」をキーワードに多方面からチャペック兄弟と戦間期チェコスロヴァキアの時代を映し出す。第2部「K・チャペックと日本」では、日本でのチャペック兄弟の受容、なかでもチャペック兄弟の戯曲および弟カレルの作家像の変遷について論じられる。第3部は、チャペック兄弟の文学に焦点を定め、分析の対象を彼らの作品自体に絞り込み、チャペック兄弟の作品の内面に迫る。以下、各論文の概要を紹介する。

巻頭論文、篠原琢「雑誌『六月』と第一次世界大戦」は、雑誌『六月』を一次資料

として、第一次世界大戦を取り巻く情勢と、それに対するチャペック兄弟を中心に広がる言論界について論じている。チャペック兄弟を取り上げる際に、雑誌『六月』を主として取り上げた研究は、これまで日本にはなかった。

『六月』は、1918年創刊の隔週雑誌で、「実験的な文学作品に並んで、政治問題や社会問題が直接論じられており」（9頁）、「前衛的な傾向を持ち、政治的にも社会主義的に共鳴した作家たちが寄り集まっていた」（22頁）という。

篠原氏は、兄ヨゼフの論説に加え、編集長のS. K. ノイマンの論説も取り上げ、第一次世界大戦を背景にして、彼らの論説には、「現在の生」と「過去との断絶」という実存主義的なモデルネの傾向が共通していたことを指摘している。また同時に、彼らの中に「チェコ性」や「国民的形式」を確立しようとする強迫観念が常にあり、それはマサリクの歴史哲学にも共有されるものであったことも指摘する。このように、チャペック兄弟を取り巻く当時の言論界を、社会主義的政治思想、マサリクの政治哲学と絡め、また戦争、国家独立を軸に捉える視点は興味深い。さらには、同時代的な位置づけにとどまらず、戦後を含む20世紀論全体の中に位置づけることの必要性を提示している。こうした点から、本論考は、チャペック研究に、新たな視点と道筋を提示した論文である。

二つ目の論考、林忠行氏の「カレル・チャペックと政治」も同じく政治がテーマであるが、こちらは、弟カレルに焦点を絞っている。カレルのエッセイを媒体に、彼の政治に対する姿勢からジャーナリストとしての評価を与えている点で、興味深い。林氏は、チャペックの政治に対する姿勢について、「政治にかなり強い関心を持ちながら一定の距離をとっている。しかし、それと同時に、人々の生活や生業がそれぞれの形で政治に結びついているということを、繰り返し説いている」（27-28頁）とまとめている。また、チャペックが政治の難しさと重要さを述べた箇所を引用し、「チャペックの政治を見る眼が、一級政治学者のそれに近いものであるということを示している」（28頁）とも指摘する。

その上で、1929年選挙と1935年選挙における、カレルの論調に変化があったことを捉える。すなわち、1929年においては、「よく考えて投票しようという内容で、特段の危機感をそこに感じ取ることはできない」（29頁）、1935年では、「それまでの連立政治の成果を評価し、それへの投票を呼びかけ」（30頁）と同時に、チェコ人の急進的なナショナリストたちを名指しで批判している点を指摘する。その姿勢が「政治学における分析的な眼差しにも通じ」（32頁）ことから、林氏はチャペックを優れたジャーナリストとして評価している。チャペック兄弟には様々な肩書きがあり、いずれの分野においても「優れた」という形容詞が与えられることが多いが、この論考による弟カレルの政治論に対する評価は説得力のあるものだと感じた。

続く論考は、石川達夫氏による「チャペックとマサリク——キュービズムと多文化

社会」である。石川氏の論考は、シンポジウムでの発表を基にした論文を別媒体（『現文研究』第92号、専修大学現代文化研究会、2016年）において発表済みとのことで、本書では発表原稿を書き起こしたもののようだ。内容は密度濃く、丁寧に緻密に分析されている。先の二つの論考同様、弟カレルとマサリクについてであるが、文化論を専門とする石川氏だけあって、両者の関係性に対して、芸術的視点を持って捉えたもので、先の二つの論文と視点が異なる。

石川氏は、『マサリクとの対話』は遠近法的様式を持つと思われませんが、これはチャペック本来のキュービズムの様式とは異なると思われませんか（39頁）という。つまり、カレルの他の作品は、エッセイや短編小説などは、日常の些細な出来事について短い文章が短期間で綴られ、モザイクのように断片的にちりばめられたものであることが多い。それに対して、マサリクは偉大な人物であり、かつマサリクとの対話に割いた期間は大変長く、「出来事の非凡さ」（同頁）から考えても、その視点は俯瞰的に語らなければならない。この視点の置き方を軸に、カレルとマサリクとの関係性を読み解いていくのだが、その際には、芸術論や芸術史に加えて社会学や哲学の理論をも用いる。加えて、チャペックの思想における「相対主義」についても分析を行う。この「相対主義」の議論は、先の林氏の「政治学における分析的な眼差し」にも通じるものであるが、それについては、続く討論の場において触れられる。

討論会は、上記3人の寄稿者、すなわちチェコおよび中欧研究を代表する政治、歴史、文化それぞれの研究者が登壇し、そこに、チャペック翻訳でも有名な言語学が専門の飯島氏もフロアから参加している。分野の異なるそれぞれの立場からそれぞれの見解が率直に語られる様子は読み応えがある。

討論では、林氏によって、チェコスロヴァキアという国家をチャペックとマサリクはどのように見ていたのか、という論点が議題として挙げられる。そのなかで、「チェコスロヴァキア主義」、「チェコスロヴァキア思想」、「チャペックの相対主義」といったキーワードが登場する。各自さまざまな意見が出るなか、篠原氏の「チェコスロバキア（原文ママ）というのは、チェコ国民の拡大系だとおそらく言え」（63頁）、マサリクやチャペックにとってチェコ人あるいはチェコスロヴァキア人の独立や民族自決は重要でなく、新しい民主主義の担い手になり得る新しい人間を作り出すことに注力していたという興味深いテーマに広がっていく。また、チャペックやマサリクのヒューマニズムにも触れられる。石川氏から、民主主義とキリスト教的な隣人愛を合体させたものが基本なのではという指摘がある一方で、篠原氏から、それらの要素とアヴァンギャルドの人々との矛盾が指摘された上で、マサリクの恐ろしさについて示唆される。討論会の様子からは、マサリク、チャペックに代表されるチェコスロヴァキアという国、あるいは文化的共同体の一筋縄ではいかない奥の深さを改めて突きつけられた。

「K・チャペックと日本」と題する第2部は、文字どおり、チャペックと日本の関係についての論考であるが、日本研究者の視点であり、かつ日本でのチャペック受容という点が非常に興味深い。第2部冒頭の論考、ペトル・ホリー氏の「チャペック兄弟と築地小劇場」は、歌舞伎や演劇の専門家としての視点からの分析が加えられている。具体的には、同時代の日本の演出家、劇作家、翻訳家であった北村喜八のチェコスロヴァキア演劇に関する紹介文を引用し、昭和の初めにおいて、すでに日本の演劇界ではチェコスロヴァキア演劇について知られていたことを明らかにする。このような論考は、日本からチェコへの眼差しだけでは得ることができない稀有なものであり、足元を照らされたような気分である。それだけでなく、チャペック兄弟の劇作家としての軌跡についても詳細に記されたのはおそらく日本では初めてではないだろうか。『ロボット』の日本語への翻訳状況、日本でどのように紹介されたのか、さらには日本の演劇界においてどのように受容されたのかについて詳述されており、日本におけるチャペック受容の始まりがよく分かる。

続く、ルカーシュ・ブルナ氏の「戦間期の日本とK・チャペック」もホリー氏の論考と同様に日本におけるチャペック受容についての論考であるが、大正末期から昭和初期の日本におけるチャペック受容の変遷に重きが置かれている。チャペックの劇作家としての受容から、いかにして散文作家として受け入れられ、散文作家としての知名度を獲得してきたか、その過程がさまざまな一次資料を用いて説明される。それらを踏まえた上で、ブルナ氏の専門である日本近代文学に与えたチャペックからの影響について、とりわけ『ロボット』を例に論述されている。日本文学研究者の視点から見た、チャペックと日本の関係を知ることができるのは貴重である。

第3部では、チャペック兄弟の文学的な側面に焦点が絞られる。まず、多くのチャペック作品の翻訳を長年に渡って手がけてきた飯島周氏が「作家としてのヨゼフ・チャペック」で、画家や挿絵画家と評されることが多い、兄ヨゼフの作家としての側面に着目する。

飯島氏による作家としてのヨゼフ評は、単にヨゼフ評にとどまらない。飯島氏が長年携わってきた日本のチェコ研究の裏側をも垣間見られるものとなっている。それは、ヨゼフを語る飯島氏自らが、ヨゼフ文学の数少ない日本語訳者であり、その訳者の裏話を知ることができるからであろう。ヨゼフの作品に話を戻せば、飯島氏は、主に、『人造人間』と『羊歯の影』のエッセイと小説を取り上げ、文学性の豊かさ、自然描写や心理描写も優れている点に触れ、ヨゼフ文学を高く評価している。

飯島氏の論考に続くのは、河岸唱平氏「カレル・チャペックのSF的作品——SF／ユートピア文学史における『ロボット』」である。河岸氏の論考は、弟カレルの『ロボット』を深く掘り下げたもので、作品を通じたカレルの思想や主張を、ユートピア文学やSF文学といったジャンルを切り口に考察する。同じ作家であるからには当前

かもしれないが、興味深いのは、第1部においてカレルの政治的思想や姿勢に対する考察と、文学作品における考察から導き出されるものに共通項が見出されることである。河岸氏は、カレルは「既存のユートピア物語のように作者の理想社会を提示しない」（141頁）と指摘している。また、「絶対的な理想によって人間がユートピアの実現に駆り立てられること自体」（142頁）に対して懐疑的であったという。ここにカレルの一貫性が読み取れる。つまり、政治に対する姿勢は、政治だけではなく社会に対して向けられたものであることが、『ロボット』の分析の中にも見られるのである。

続く阿部賢一氏のヨゼフ文学論も興味深い。弟カレルもそうだが、チャペック兄弟の活躍の時代が、大戦間期とほぼ一致することを考えると、彼らと戦争との関係、あるいは戦争が彼らに与えた影響は避けて通れない。阿部氏の論考は、戦争とヨゼフ文学との関係に正面から向き合ったものである。ヨゼフの作品の中でも、短編集『レリオ』（1917）、『足を引きずる巡礼者』（1936）、『雲に綴って』（1936-1939執筆、1947刊行）、『強制収容所からの詩』（1940年代前半執筆、1946刊行）を取り上げ、戦争を軸にそれらの作品を一本の線で結んでいく。「不安」のなかで「身体」に希望を見出すといった「中欧の表現主義の世界観に呼応するもの」（151頁）は、二つの戦争、収容所という特殊な環境の中で紡がれた詩の中にさえも、内奥に同様の呼応が見られることを提示している。

最後の論考、マルケータ・ブルナ・ゲブハルトヴァー氏による「一つの物語、二つの作品——K・チャペックの『マクロプロス事件』とL・ヤナーチェクによる同名のオペラ」は、シンポジウム当日の発表ではなく、本書のための特別寄稿論文である。ゲブハルトヴァー氏は、チェコ語チェコ文学を専攻、現在ではチェコ語教育、中欧の女流文学を研究中とのことだが、論考は、弟カレルと音楽との関係を取り上げたものである。冒頭ではカレルの音楽に対する関心の高さについて言及している。続く本題では、カレルの戯曲『マクロプロス事件』と、それを原作としたヤナーチェクによるオペラの作品に見られる差異を検討することで、それぞれの作品の持つ意義を考察する。とりわけ、作品の結末の描かれ方の違いや、チャペックの原作のテーマの普遍性を指摘している。この論考は、音楽作品と比較することで、カレル作品に対する新たな解釈を提示したものである。

本書が論集として刊行された意義は大きい。個々の論文を読んだだけではチャペック兄弟像の側面にしか焦点が当たらないが、専門分野の異なる執筆陣の視点が加わることによって、その像が多面的に描かれ、立体的な姿を現す。加えて、それらの異なる分析のなかにもある共通項が見出されると、チャペック兄弟の中には一筋の線も浮かび上がってくるのだ。本書は、チャペックやその時代に興味を持つ読者なら誰にとっても新しいと思えるチャペック像を提供してくれるだろう。